

注文帳

泉鏡花

青空文庫

剃刀研

十九日

紅梅屋敷

作平物語

夕空

点灯頃

雪の門

二人使者

左の衣兜

化粧の名残

剃刀研

一

「おう寒いや、寒いや、こりやべらぼうだ。」

と天窓^{あたま}をきちんと分けた風俗、その辺の若い者。双子^{ふたご}の着物に白ッぽい唐棧^{とうざん}の半纏^{はんてん}、博多^{はかた}の帯、黒八丈の前垂^{まえだれ}、白綾子^{しろりんず}に菊唐草浮織^{はなばなう}の手巾^{ハンケチ}を頸^{うなじ}に巻いたが、向風^{むこうかぜ}に少々鼻下を赤うして、土手からたらたらと坂を下り、鉄漿溝^{おはぐろどぶ}というのについて揚屋町^{あげやまち}の裏の田町の方へ、紺足袋^{ひよりげた}に日和下駄^{ひつぱち}、後の減つたる代物^{しろもの}、一体なら此奴豪勢^{こいつ}に発奮^{はっふん}むのだけれども、一進^{いっしん}が一十、二八の二月で工面^{あしどり}が悪し、霜枯^{しもがれ}から引続き我慢をしてい

るが、とかく気になるという足取。

ここに金鰐屋^{きんつば}、荒物屋、煙草屋^{たばこ}、損料屋、場末の勧工場^{かんこうば}見るよう、狭い店のごたごたと並んだのを通越すと、一間口^{けんぐち}に看板をかけて、丁寧^{ていねい}に絵にして剪刀^{はさみ}と剃刀^{かみそり}とを打違^{ぶちが}え、下に五すけと書いて、親仁^{おやじ}が大目金^{めがね}を懸けて磨桶^{とぎおけ}を控え、剃刀の刃を合せてい

る図、目金と玉と桶の水、切物きれものの刃を真蒼まつさおに塗って、あとは薄墨うすずみでぼかした彩色さいしき、これならば高尾の二代目三代目時分の禿かむろつかいが使に來ても、一目して研屋とぎやの五助である。

敷居の内は一坪ばかり凸凹のたたき土間。隣のおでん屋の屋台が、軒下から三分が一ばかり此方こなたの店前みせさきを掠めた蔭かげに、古布子ふるぬのこで平胡坐ひらあぐら、継つぎはぎの膝かけを深うして、あわれ泰山崩るるといえども一髪動かざるべき身の構え。砥石といしを前に控えたは可いが、怠惰なまけが通りものの、真鍮しんちゆうの煙管きせるを脂下やにさかりに啣くわえて、けろりと往來を視ながめている、つい目と鼻なる敷居際につかつかど入ったのは、件の若い者くだん、捨すてどんなり。

手を懷にしたまま胸を突出し、半纏の袖口を兩方入山形いりやまがたという見得で、

「寒いじゃあねえか、」

「いやあ、お寒う。」

「やっぱりそれだけは感じますかい、」

親仁は大口を開あいて、啣くわえた煙管を吐出すばかりに、

「ははははは、」

「暢氣のんきじゃあ困るぜ、ちつと精を出しねえな。」

「一言もござりませんね、はははははは。」

「見や、それだから困るてんじやあねえか。ぼんやり往來を見ていたって、何も落して行く奴やつアありやしねえよ。しかも今時分、よしんば落して行つた処にしろ、お前何だ、拾つて店へ並べておきや札をつけて軒下へぶら下げておくと同一おんなじで、たちまち鳶とんびトローローローだい。」

「こう、憚はばかりだが、そんな日い附わくつきの代物は一ツも置いちやあねえ、出処でどこの確たしかなものばかりだ。」と件くだんののみさしを行火あんかの火入へぽんと払はたいた。真鍮はたのこの煙管たぐいさえ、その中に置いたら異彩を放ちそうな、がらくた沢山、根附ねつけ、緒あ々か《おじめ》の類たぐい。古庖丁、塵劫じんこう記きなどを取交せて、石炭箱を台に、雨戸よこたを横え、赤毛布あかげつとを敷いて並べてある。

「いずれそうよ、出処たしかは確なものだ。川尻ごんのかみ権守、溝どぶのなか中、長左衛門ね、掃溜衛門之介さかなどからお下り遊あそばしたろう。」

「愚哉おろか々々、これ黙もくらつせえ、平たいちの捨吉なんじ、汝今頃この処きたに來つて、憎まれ口をきくようじやあ、いかさま地じいろが無ねえものと見える。」と説破せつぱ一番して、五助はぐツとまた横よこぐわ脚え。

平の捨吉これを知くと、壇の浦没落の顔がんしよく色で、

「ふむ、余り殺生が過ぎたから、ここん処精進よ。」と戸外おもての方へ目を反そらす。狭い町を一

杯に、ひるがえり 昼 帰 を乗せてがらがらがら。

二

あとは往来ゆききがぼったり絶えて、魔が通る前後あとさきの寂たる路みちかな。如月きさらぎ十九日の日がまともにさして、土には泥濘ぬかるみを踏んだ足跡も留めず、さりながら風は颯々さっさつと冷く吹いて、遥はるかに高い処はたきで払をかける。

「串 戯じょうだん じゃあねえ、」と若い者は立直つて、

「紺屋こうやじゃあねえから明後日あさってとは謂いわせねえよ。楼うちの妓衆おいらんたちから三挺ちようばかり来てる筈はずだ、もう疾とつくに出来てるだろう、大急ぎだ。」

「へいへい。いやまた家業の方は真面目まじめでございす、捨さん。」

「うむ、」

「出来てるにや出来てます、」と膝かけからすぽりと抜けて、行火あんかを突出しながらずいと立つ。

若いものは心付いたように、ハアトと銘のあるのを吸いつける。

五助は背後向うしろむきになつて、押廻して三段に釣つた棚に向い、右から左のへ三度ばかり目を通すと、無慮四五百挺の剃刀かみそりの中から、箱を二挺、紙にくるんだのを一挺、目方を引くごとく掌てのひらに据えたが、捨吉に差向けて、

「これだ、」

「どれ、」

箱を押すとすつと開いて、研澄とぎすましたのが素直まつすぐに出る、裏書をちよいと視ながめ、

「こりや青柳あおやぎさんと、可よし、梅の香さんと、それから、や、こりや名がねえが間違まちがやしないか。」

「大丈夫、」

「確たしかかね。」

「千本ごつたになつたつて私わつしが受取つたら安心だ、お持ちなせえ、したか捨さん、」

「なあに、間違つたつて剃刀だあ。」

「これ、剃刀だあじやあねえよ、お前めえさん。今日は十九日だぜ。」

「ええ、驚かしちやあ不可いけえ、張店はりみせの遊女おいらんに時刻を聞くのと、十五日過すぎに日をいうな

あ、大の禁物だ。年代記にも野暮の骨頂としてございますな。しかも今年は閏うるがねえ。」

「いえ、閨があらうとあるまいと、今日は全く十九日だろうな。」と目金越に覗き込むようにして謂ったので、捨吉は変な顔。

「どうしたい。そうさ、」

「お前さん楼じやあ構わなかつたつかか。」

「何を、」

「剃刀をさ。」

謂うことはのみ込めないけれども、急に改まって五助が真面目だから、聞くのも気がさして、

「剃刀を？ おかしいな。」

「おかしくはねえよ。この頃じやあ大抵何楼でも承知の筈だに、どうまた気が揃ったか知らねえが、三人が三人取りに寄越したのはちつと変だ、こりやお気をつけなさらねえと危えよ。」

ますます怪訝な顔をしながら、

「何も変なこたアありやしないんだがね、別に遊女たちが気を揃えてというわけでもなしさ。しかしあたろうというのは三人や四人じやあねえ、遣れるもんなら楼に居るだけ残

らずというのよ。」

「皆みんなかい、」

「ああ、」

「いよいよ悪かろう。」

「だってお前めえ、床屋が居続けをしていると思や、不思議はあるめえ。」

五助は苦にが笑わらいをして、

「洒落しゃれじやあないというに。」

「何、洒落じやあねえ、まったくの話だよ。」と若いものは話に念がい入って、仕事場の前に腰を据えた。

十九日

三

「昨夜ひけ過すぎにお前めえ、威勢よく三人で飛込んで来た、本郷辺の職人徒てあいぎ。今朝になつて直すというから休業やすみは十七日だに變だと思ふと、案の定なんだろうじやあないか。

すつたもんだと捏こねかえしたが、言種いぐさが氣に入つたい、総勢二十一人というのが昨日のこつた、竹の皮包の腰兵糧でもつて巢鴨すがもの養育院というのに出かけて、施ほどこしのちよきちよきを遣やつてき、総がかりで日の暮れるまでに頭の数五百そくと六十が処片づけたという奇特な話。

その崩くずれが豊国へ入つて、大廻りに舞台が交かわると上野の見晴みはらしで勢揃せいぞろいというのだ、それから二人三人にんずつ別れ別れに大門へ討入うちいりで、格子さきで冑首かぶとと見ると名乗なのりを上げた。

もとよりひつてんは知れている、ただは遁にげようたあ言わないから、出来るだけ仕事をさせろ。愚図ぐず々々吐ぬかすと、処々に伏勢ふせぜいは配つたり、朝鮮伝来の地雷火が仕懸かけけてあるから、合図の煙管きせるを払はたくが最後、芳原は空くうへ飛ぶぜ、と威勢の好い懸合かけあいだから、一番景氣だと帳場でも買ったのさね。

そこで切味の可いいのが入用というので、ちようどお前めえん処ところへ頼んだのが間に合うだろうと、大急ぎで取りに來たんだが、何かね、十九日がどうかしたかね。」

「どうのこうのつて、真面目なんだ。いけ年としつかまつを仕つて何も万八を極きめるにや当りません。」

「だからさ、」

「大概てえげえ御存じだろうと思うが、じゃあ知らねえのかね。この十九日というのは厄日ほかでさ。別に船頭衆せんどしゅうが大晦日おおみそかの船出をしねえというような極きまつたんじゃありません。他の同商売にはそんなことは無ねえようだが、廓中くるわのを、こうやって引受けてる、私許うちばかりだから忌いやじやあねえか。」

「はて——ふうむ。」

「見なさる通りこうやって、二百そく三百と預つてありましよう。殊にこれなんざ御銘々使せい込んだ手加減があろうというもんだから。そうでなくツたつて粗末にやあ扱あいしません。またその癖誰もこれを一挺ちようどうしようと云うのも無ねえてツた勘定だけれど、数のあるこつたから、念にやあ念を入れて毎日一度ずつは調べるがね。紛失ふんじつするなんてえ馬鹿げたこととはない筈はずだが、聞きなせえ、今日だ、十九日というと思議に一挺ずつ失なくなくなります。」

「何が、」と変な目をして、捨吉は解わかつたようで吞のみこ込めない。

「何がツたつて、預うちつてる中のさ。」

「おお、」

「ね、御覧なせえ、不思議じゃありませんかい。私わつしもどうやらこうやら皆みなさん様で鼻ひいき屑に

して、五助のでなくツちやあ齒切がしねえと、持込んでくんなさるもんだから、長年居附いて、婆はばどもここで見送つたというもんだ。先せんの内もちよいちよい紛失したことがあるにやあります。けれども何の氣も着かねえから、そのたんびに申訳をして、事済みになりくしたんだが。

毎々のことでしよう、氣をつけると毎月さ、はて変だわえ、とそれからいつでも寢際にやあちやんと、ちゆう、ちゆう、たこ、かいなのちゆ、と遣ります。

いつの間にか失くなるさ、怪けしからねえこつたと、大きに考え込んだ日が何でも四五年前だけれど、忘れもしねえ十九日。

聞きなせえ。

するとその前の月にも一昨日おととい持つて来たとして、東屋あずまやの都みやこという人の新造衆しんぞしゅうが取りに来て、

五助は振向いて背後うしろの棚、件くだんの屋台の蔭ではあり、間狭まぜまなり、日は当らず、剃刀ばかりで陰気なのを、目金越に見て厭いやな顔。

四

「と、ここから出そうとすると無からうね。探したが探したがさあ知れねえ。とうとう平あやまりのこつち凹^{へこ}み、先方^{さきさま}様むくれとなつたんだが、しかも何と、その前の晩氣を着けて見ておいたんじやアあるまいか。

持つて来たのが十八日、取りに来たのが二十日の朝、検^{しら}べたのが前の晩なら、何でも十九日の夜中だね、希代なのは。」

「へい、」と言つて、若い者は巻^{まきたばこ}煙草を口から取る。

五助は前^{まえ}屈^{かが}みに目金を寄せ、

「ほら、日が合つてましよう。それから氣を着けると、いつかも江戸町のお喜^き乃さんが、やつぱり例の紛失で、ブツブツいつて帰^{けえ}つたツけ、翌^{あくるひ}日の晩方、わざわざやつて来て、（どうしたわけだか、鏡台の上に、）とこうだ。私^{うち}許^{うち}へ預つて、取りに来て失^うせたものが、鏡台の上にあるは、いかがでござい。

鏡台の上はまだしもさ、悪くすると十九日には障子の棧^{さん}なんぞに乗つかつてゐる内があるツさ。

浮舟^{うしづな}さんが爛^{かんべや}部屋に下^{さが}つていて、七日ばかり腰^{なぬか}が立たねえでさ、夏のこつた、湯^{へえ}へ入つ

ちやあ不可^{いけ}えと固く留められていたのを、悪^{わる}汗^{あせ}が酷^{ひど}いといって、中^{なか}引^ひ過^がぎに密^そツと這^は出して行^いつて湯殿口でぎっくり膝を切つて、それが許^{もと}で亡くなつたのも、お前^{めえ}、剃刀がそこに落^おツちちていたんだそうさ。これが十九日、去年の八月知つてゐるだろう。

その日も一挺紛失^{ふんしつ}さ、しかしそりや浮舟^{うしづ}さんの楼^{うち}のじやあねえ、確^きか喜^き怒^ぬ川の緑^{ろく}さんのだ、どこへどう間違^{まちが}つて行^ゆくのだから知れねえけれども、厭^{いや}じやあねえか、恐^{おそ}しい。

引^ひくるめて謂^いや、こつちも一挺なくなつて、廓^{くわく}内^{うち}じやあきつと何^ど楼^どかで一挺だけ多^{おほ}くなる勘定^{かんじやう}だね。御入用のお客様はどなただか早や知らねえけれど、何でも私^{わつし}が研^ぎ澄^{じやう}したのをお持ちなさると見えるて、御念^{ごねん}の入^いつた。

澆^{ばう}としちやあ、お客にまで気を悪くさせるから伏せてはあろうが、お前^{めえ}さんだ、今日は剃刀^{つか}を扱^{つか}わねえことを知^しつていそうなもんだと思うが、楼^{うち}でも気がつかねえでいるのかしら。」

「ええ！ ほんとうかい、お前^{めえ}とは妙に懇意^{こんい}だが、実は昨今だから、……へい？」と顔の筋を動かして、眉^{まゆ}をしかめ、目^めを睜^{みは}ると、この地色の無い若い者は、思^{おも}わず手^てに持^もつた箱^{はこ}を、ばったり下^{した}に置^おく。

「ええ、もし、」

「はい。」と目金を向ける、氣を打った捨吉も齊しく振向くと、皺噺れた声で、

「お前さん、御免なさいまし。」

敷居際に蹲った捨吉が、肩のあたりに千草色の古股引、垢じみた尻切半纏、よれの三尺、袍衣かと怪まれる帽を冠って、手拭を首に巻き、引出し附のがたがた箱と、海鼠形の盥、もう一ツ盥を累ねたのを両方振分にして天秤で担いだ、六十ばかりの親仁、瘡さらばい、枯木に目と鼻とのついた姿で、さもさも寒そう。

捨吉は袖を交わして、ひやりとした風、つつけんどんなもの謂で、

「何だ、」

「はい、もしお寒いこッてござります。」

「北風のせいだな、こちとらの知ったこッちやあねえよ。」

「へへへへへ、」と鼻の尖で寂しげなる笑を洩し、

「もし、唯今のお話は、たしか幾日だとかおっしゃいましたね。」

五助は目金越に、親仁の顔を瞻みまもっていたが、

「やあ作平さくへいさんか、」といつて、その太わくの面道具おもてどうぐを耳から捻ねじり取るよう、撈もぎはなして膝の上。口をこすつて、またたいて、

「飛んだ、まあお珍しい、」と知った中。捨吉間が悪かったものと見え、

「作平さん、かね。」と低声こごえで口の裡うち。

折から、からからと後齒あとばの蹺あしおと音、裏口ではたと留やんで、

「おや、また寝そべつてるよ、図々しい、」

叱言こごとは犬か、盗人猫ぬすつとねこか、勝手口の戸をあけて、ぴっしやりと蓮葉はすはにしめたが、浅間せんげんだから直じきにもう鉄瓶をかちりといわせて、障子の内に女の氣勢けはい。

「唯今。」

「帰けえんなすつたかい、」

「お勝さん？」と捨吉は中腰に伸上りながら、

「もうそんな時分かな。」

「いいえ、いつもより小一時間遅いんですよ、」

という時、二枚立だてのその障子の引手の破目やぶれめから仇々あだあだしい目が二ツ、頬のあたりがほ

の見た。蓋し昼の間寐るだけに一間の半を借り受けて、情事で工面の悪い、荷物なしの新造が、京町あたりから路地づたいに今頃戻つて来るとのこと。

「少し立込んだもんですからね、」

「いや、御苦労様、これから緩りとおひけに相成ます?」

「ところが不可ないの、手が足りなくツて二度の勤と相成ります。」

「お出懸か、」と五助。

「ええ、困るんですよ、昨夜もまるツきり寐ないんですもの、身体中ぞくぞくして、どうも寒いじやアありませんか、お婆さん堪らないから、もう一枚下へ着込んで行きましようと思つて、おお、寒い。」といつてまた鉄瓶をがたりと遣る。

さらぬだに震えそうな作平、

「何てえ寒いこツてございましょう、ついぞ覚えませぬ。」

「はツくしよい、ほう、」と呼吸を吹いて、堪りかねたらしい捨吉続けざまに、

「はツくしよい! ああ、」といつて眉を顰め、

「噂かな、恐しく手間が取れた、いや、何しろ三挺頂いて帰りましょう。薄気味は悪いけれど、名にし負う捨どんがお使者でさ、しかも身替を立てる間奥の一間で長ツ尻と来て

いらあ。手ぶらでも帰られまい。五助さん、ともかくも貰って行くよ。途中で自然からこの蓋が取れて手が切れるなんざ、おつと禁句、」とこの際、障子の内へ聞かせたさに、捨吉相方なしの台辞あり。

五助はまめだつて、

「よくそう謂いなせえよ、」

「十九日かね、」と内からいう。

「ええ、御存じ、」といいながら、捨吉腰を伸してずいと立った。

「希代だわねえ。」

「やつぱり何でございますかい、」と作平はこれから話す氣、振かえて、荷を下し、屋台へ天秤を立てかける。

捨吉はぐいと三挺、懷へ突込みそうにしたが、じつと見て、

「おツと十九日。」

という処へ、荷車が二台、浴衣の洗濯を堆く積んで、小僧が三人寒い顔をしながら、日向をのツしりと曳いて通る。向うの路地の角なる、小さな薪屋の店前に、炭団を乾かした背後から、子守がひよいと出て、ばたばたと駆けて行く。大音寺前あたりで飴屋の囃子。

紅梅屋敷

六

その荷車と子守の行違ゆきちがったあとに、何にもない真赤まつかな田町の細路へ、捨吉がぬいと出る。

途端にちりりと鈴りんの音、袖に擦合うばかりの処へ、自転車一輛、またたきする間もあらせず、

「危い、」と声かけてまた一輛、あつと退すさると、耳みみもと許へ再び、ちりちり！

土手の方から颯さつと来たが、都合三輛か、それ或あるいは三羽びきか、三疋びきか、燕つばめか、兔か、見分けてもつかず、波の揺れるようにたちまち見えなくなつた。

棒立ちになつて、捨吉茫ぼうぜん然と見送りながら、

「何だ、一文も無なえ癖に、」

「てめえ汝じやアあるまいし。」

「や、」

「どうした。」

「へい、」

「近頃はどうか、ちったあたりでもついたか、てめえ汝、桐島のお消けしに大分執心だというじやあないか。」

「どういたしまして、」

「少しも御遠慮には及ばぬよ。」

「いえ、先方さきへでございます、旦那だんなにじやあございません。」

「そうか、いや意気地いくじの無い奴やつだ。」と腹藏はらぞうの無い高笑たかわらい。少禿すこはげ天窓あたまてらてらと、色づきの好い顔容かおかたち、年配は五十五六、結城ゆうきの襲衣かさねに八反の平紵ひらぐけ、棒縞ぼうじまの綿入半わたいればんで纏んをぞろりと羽織はねつて、白縮緬しろちりめんの襟巻くるわをした、この旦那と呼ばれたのは、二上屋藤三郎ふたかみやとうさぶろうという遊女屋の亭主で、廓内くわくうちの名望家、当時見番の取締とりしまりを勤めているのが、今向むこうの路地の奥からぶらぶらと出たのであった。

界限かいがいの者が呼んで紅梅屋敷という、二上屋の寮は、新築して実にその路地の突つきあたり当、

とおりの長屋並の屋敷越に遠くちらちらとある紅は、早や咲初めた荅である。

捨吉は更めて、腰を屈めて揉手をし、

「旦那御一所に。」

「おお、これからの、」

という処へ、萌黄裏の紺看板に二の字を抜いた、切立の半被、そればかりは威勢が可いが、かれこれ七十にもなろうという、十筋右衛門が向願巻。

今一人、唐縮緬の帯をお太鼓に結んで、人柄な高島田、風呂敷包を小脇に抱えて、後前に寮の方から路地口へ。

捨吉はこれを見て、

「や、爺さん、こりや姉さん、」

「ああ、今日はちつとの、内証に芝居者のお客があつての、実は寮の方で一杯と思つて、下拵に来てみると、困るじゃあねえか、お前。」

「へい、へい成程。」

「お若が例のやんちゃんをはじめての、騒々しいから厭だと謂うわ。じゃあ一晩だけ店の方へ行つていろと謂つたけれど、それをうむという奴かい。また眩暈をされたり、虫でも

発^{おつ}されちやあ叶^{かな}わねえ。その上お前、ここいらの者に似合わねえ、俳^{やく}優^{しゃ}というと目の敵^{かたき}にして嫌うから、そこで何だ。客は向^むへ廻^{こう}すことにして、部屋の方の手伝に爺やとこのお辻をな、」

「へい、へい、へい、成程、そりやお前^{めえ}さん方御苦勞様。」

「はははは、別^{おしもやしき} 莊^{あなごもり}に穴籠^{じじ}の爺めが、土用干でございますてや。」

「お前さん、今日は。」とお辻というのが愛想^いの可^いい。

藤三郎はそのまま土手の方へ行こうとして、フト研屋^{とぎや}の店を覗^{のぞきこ}込んで、

「よくお精が出るな。」

「いや、」作平と共に四人^{かた}の方を見ていたのが、天窓^{あたま}をひたり、

「お天気で結構でございます。」

「しかし寒い。」と藤三郎は懷手で空を仰ぎ、輪形^{なり}にずツと^{みまわ}して、

「筑波の方に雲が見えるぜ。」

「嘘あねえ。」

と五助はあとでまた額を撫^なで、

「怠けちやあ不可^{いけ}いと謂^いわれた日にやあ、これでちつとは文句のある処だけれど、お精が出ますとおつしやられてみると、恐入るの門なりだ。」

實際また我ながらお怠^ばけ遊ばす、婆^{ばあ}さんの居た内はまだ稼ぐ気もあつたもんだが、もう叶^{かな}わねえ。

人間色氣と食氣が無くなつちやあ働けねえ、飲^{のみ}けで稼ぐという奴^{やつ}あ、これが少ねえもんだよ、なあ、お勝さん、」と振向いて呼んでみたが、

「もうお出懸^だ、いや、よく老実^{まめ}に廻ることだ。はははは作平さん、まあ、話しなせえ、誰も居ねえ、何ならこつちへ上つて炬燵^{こたつ}に當つてよ、その障子を開けりや可^いい、はらんばいになつて休んで行^ゆきねえ。」

「そうもしてはいられぬがの、通りがかりにあれじや、お前さんの話が耳に入つて、少し附かぬことを聞くようじゃけれど、今のその剃^{かみ}刀^{そり}の失^うせるといふ日は、確か十九日とかいわしつた、」

「むむ、十九日十九日、」と、氣乗^{きのり}がしたように重ね返事、ふと心付いた事あつて、

「そうだ、待ちなせえ、今日は十九日と、」

五助は身を捻^{ひね}つて、心^{こころ}覚^{おぼえ}、後^{うしろ}ざまに棚なる小箱の上から、取^{とり}下^{おろ}した分厚な一綴^{てつ}の註文帳。

膝の上で、びたりと二つに割つて開け、ばらばらと小口を返して、指^{さき}の尖でずツと一わたり、目金で見通すと、

「そうそうそう、」といつて仰向^{あおもむ}いて、掌^{たなそこ}で帳面をたたくこと二三度す。

作平もしよぼしよぼとある目で覗^{のぞ}きながら、

「日切^{ひぎれ}の仕事かい。」

「何、急ぐのじゃあねえけれど、今日中に一挺^{ちよあし}私が気で研いで進ぜたいのがあつたのよ、つい話にかまけて忘りようとしたい、まあ、」

「それは邪魔をして気の毒な。」

「飛んでもねえ、緩^{ゆっく}りしてくんねえ。何さ、実はお前^{めえ}、聞いていなすつたか、その今日だ。この十九日にやあ一日仕事を休むんだが、休むについてよ、こう水を更^{あらた}めて、砥^{といし}石を洗つて、ここで一挺^{ねんいり}念入というのがあるのさ、」

「氣に入つたあつらえかの。」

「むむ、今そこへ行きなすった、あの二上屋の寮が、」
と向うの路地を指した。

「あ、あ、あれだ、紅梅が見えるだろう、あすこにそのお若さんてって十八になるのが居て、何だ、旦那の大の秘藏女さ。」

そりや見せたいような容色だぜ、寮は近頃出来たんで、やっぱり女郎屋の内証で育つたもんだが、人は氏よりというけれど、作平さん、そうばかりじゃあねえね。

お蔭で命を助かった位な施を受けてるのがいくらかもあら。

藤三郎父親がまた夢中になつて可愛がるだ。

少姐の袖に縋りや、抱えられてる妓衆の証文も、その場で煙になりかねない勢だけ

ど、そこが方便、内に居るお勝なんざ、よく知つていうけれど、女郎衆なんという者は、

ハテ凡人にやあ分らねえわ。お若さんの容色が佳いから天窓を下げるのが口惜いとよ。

私あ鏝一文世話になつたんじゃあねえけれど、そんなこんなでお前、その少姐が大

な。どうだい、こう聞きやあお前だつて鼯鼠にしぎあなるめえ。死んだ田之助そツくりだあな。」

八

「ところで御註文を格別の扱^{あつかい}だ。今日だけは他の剃刀を研がねえからね、仕事と謂^いや、内じゃあ商売人のものばかりというもんだに因^よつて、一番不浄除^{よけ}の別火^{べつび}にして、お若さんのを研^ひごうと思^{おも}つて。

うつかりしていたが、一挺来^きていたというもんだ、いつでもこうさ。

一体十九日の紛失一件は、どうも廓^{くるわ}にこだわつてるに違^{ちが}えねえ。祟^{たた}るのは妓衆^{こどもし}なんだからね、少姐^{ねえさん}なんざ、遊女^{おいらん}じゃあなし、しかも廓^{くるわ}内に居^ゐるんじやあねえから構^{かま}うめえと思^{おも}つてよ。

まあ何にしろ変な訳^{わけ}さ。今に見^みねえ、今日もきつと誰^{どなた}方^{かた}か取りにござる。いや作平さん、狐千年^{こふせん}を経^ふれば怪^{あや}をなす、私が剃刀^{かみそり}研^{とぎ}なんざ、商売往来にも目立^{めだ}たねえ古物^{こぶつ}だからね、こんな場所がらじやアあるし、魔^まがさすと見^みえます。

そういやあ作平さん、お前さんの鏡^{かがみ}研^{とぎ}も時代なものさ、お互^{たがえ}に久しいものだが、どうだ、御無事かね。二階から白井権八の顔でもうつりませんか。い。」

その箱と盥たらいとを荷になつた、瘦やせさらばいたる作平は、蓋けだし江戸市中世渡よわたりぐさに俵おもかげを残した、鏡を研いで活業なりわいとする爺じいであつた。

淋うなずしげに頷うなずいて、

「ところがもし御同様じゃで、」

「御同様!」と五助は日脚を見て仕事に懸かる氣、寮の美人の剃刀を研ぐ氣であろう。桶おけの中で砥石といしを洗いいながら、慌いてたように謂返いした。

「御同様は氣がねえぜ、お前めえの方にも目いがあるかい。」

「ある段か、お前さん。こういうては何じやけれど、田町の剃刀研、私わしは広徳寺前を右へ寄よつて、稻荷町いなりちようの鏡研、自分達が早や変化へんげの類たぐいじや、へへへへへ。」と薄うす笑わらい。

「おやおや、汝てめえから名乗る奴やつもねえもんだ。」と、かつちり、つらつらと石を合せる。

「じやがお前、東京と代が替かつて、こちらはまるで死んだ江戸のお位牌いはいの姿じやわ、羅ら宇屋おの方はまだ開あけたのが出来たけれど、もう狸穴まみあなの狸、梅暮里の鱒どじようなどと同一ひとつじやて。その癖職人絵合せの一枚刷ずりにや、烏帽子素袍えぼしすおうを着て出ようというのじや。」

「それだけになお罪が重いわ。」

「まんざらその祟たたりに因縁のないことも無いのじや、時に十九日の。」

「何か剃刀の失せるに就いてか、」

「つい四五日前、町内の差配人^{おおよ}さんが、前の溝川の橋を渡つて、藪^{しとみ}を下した薄暗い店さきへ、顔を出さしつたわ。はて、店賃^{たなちん}の御催促。万年町の縁の下へ引越^{ひっこ}すにも、彪^{むくいぬ}犬に渡^{わた}をつけんことにやあなりませぬ。それが早や出来ませぬ仕^し誼^ぎ、一刻も猶予ならぬ立退^{たちの}けでござりましょう。その儀ならば後^{のち}とは申しませぬ、たった今川中へ引越しますと謂^いうたらば。

差配^{おおよ}さん 苦^{にが}笑^{わらい}をして、狸爺^{どぶろく}め、濁酒^{くら}に喰い酔つて、千鳥足で歸つて来たとして、棧^さ橋^{んばし}を踏外^{おれ}そうという風かい。溝店^{どぶだな}のお祖師様と兄弟分だ、少^わい内から泥濘^{ぬかぬみ}へ踏込んだ験^{ためし}のない己^{おれ}だ、と、手前^{てめえ}太平楽を並べる癖に。

御意でござります。

どこまで始末に了^おえねえか数^{すう}が知れねえ。可^いいや、地尻の番太と手前^{てめえ}とは、己^おが芥子坊主^{けしほ}の時分^{うず}から居つきの厄介者^{あて}だ。当もねえのに、毎日研物の荷を担いで、廓内をぶらついて、帰りにやあ箕輪^{みのわ}の浄閑寺へ廻つて、以前御最^{ごひいき}厚になりましてと、遊女^{おいらん}の無縁の塔婆に挨拶^{あいさつ}をして来やあがる。そんな奴も差配^{さはい}内になくツちやあお祭の時幅が利かねえ。俵^{せがれ}は稼いでるし、稻荷町の差配は店賃の取り立てにやあ歩行^{ある}かねえツての、むむ。」と大

得意。この時五助はお若の剃刀をぴつたりと砥^とにあてたが、哄然^{こうぜん}として、
「氣に入つた氣に入つた、それも鼯^も肩の仁左衛門だい。」

作平物語

九

「ところで聞かつしやい、差配^{おおよ}さまの謂^いうのには、作平、一番^{ひとつ}念入^{ねんいり}に遣^やつてくれ、その
代り儲かるぜ、十二分のお手当だと、膨^{ふと}らんだ懷^{こころ}中^{ちゆう}から、朱^{しゆ}総^{そう}つき、錦^{にしき}の袋入^{ふくろいり}とい
のを一面の。

何でも差配^{おおよ}さんがお出入^{でいり}の、麴^{こう}町^{じまち}辺^への御大家^{ごだい}の鏡^{かがみ}じやそうな。

さあここじやよ。十九日に因縁^{いんえん}づきは、憚^{はば}つてお名前^なは出さぬが、と差配^{おおよ}さんが謂^いわつ
しやる。

その御大家^{ごだい}は今寡婦^{べいけさま}様^{さま}じや、まず御後室^{ごごしつ}というのかい。ところでその旦那様^{だんなさま}というのは

しかるべきお侍、もうその頃は金モオルの軍人というのじや。

鹿兒島戦争の時に大したお手柄があつて、馬車に乗らつしやるほどな御身分になんなされたとの。その方が少い時よ。

誰もこの迷ばかりは免れぬわ。やつぱりそれこちらがお花主の方に深いのが一人出来て、雨の夜、雪の夜もじや。とどの詰りがの、床の山で行倒れ、そのまんまずツと引取られたいより他に、何の望もなくなつたというものかい。居続けの朝のことだとの。

遊女は自分が薄着なことも、髪のこわれたのも気がつかずに、しみじみと情人の顔じや。窠れりや窠れるほど、嬉しいような男振じゃが、大層髭が伸びていた。

鏡台の前に坐らせて、嗽茶碗で濡した手を、男の顔へこう懸けながら、背後へ廻つた、とまあ思わつせえ。

遊女は、胸にものがあつてしたることか。わざと八寸の延鏡が鏡立に据えてあつたが、男は映る顔に目も放さず。

うしろから肩越に気高い顔を一所にうつして、遊女が死のうという気じや。

あなた、私の心が見えましよう、と覗込んだ時に、ああ、堪忍しておくんない、とその鏡を取つて俯向けにして、男がぴつたりと自分の胸へ押着けたと。

何を他人がましい、あなた、と肩につかまった女の手を、背後うしろざまに弾ねたので、うんにや、愚痴なようだがお前には怨うらみがある。母様おつかさんによく肖た顔を、ここで見るのは申訳がないといつて、がつくり俯向いて男泣おとこなき。

遊女おいらんはこれを聞くと、何と思つたか、それだけのものさえ持てようかという瘦やせた指で、剃刀かみそりを握つたまま、顔の色をかえて、ぶるぶると震えたそうじやが、突然いきなり逆手に持直して、何と、背後うしろからものもいわずに、男の咽喉のどへ突込んだ。

五助は剃刀の平を指で压おさえたまま、ひよいと手を留めた。

「おお、危あぶえ。」

「それにの、刃物を刺すといや、針さしへ針をさすことより心得ておらぬような婦人おんなじやあなかつた。俺おらあ遊女おいらんの名と坂の名はついぞ覚えたことは無なえツて、差配おおよさんは忘れたと謂いわツしたつけ。その遊女は本名お縫さんと謂つての、御大身じやあなかつたそうじやが、歴れつきとした旗本のお嬢さんで、お邸やしきは番町辺。

何でも徳川様瓦解がかいの時分に、父様おとつさんの方は上野へ入へんなすつて、お前、お嬢さんが可か哀わいそうにお邸の前へ莫座ござを敷いて、蒔絵まきえの重箱だの、お雛様ひなさまだの、錦絵にしきえだのを売つてござつた、そこへ通りかかつて両方で見初めたという悪縁じや。男の方は長州藩の若侍。

それが物変り星移りの、講釈のいいぐさじゃあないが、有為転変、芳原でめぐり合、^{あい}という深い交情であつたげな。

牛込見附で、仲間の乱暴者を一人、内職を届けた帰りがけに、もんどりを打たせたという手利なお嬢さんじや、廓でも一時四辺を払ったというのが、思い込んで剃刀で突いた奴。

「ほい。」

十

「男はまるで油断なり、万に一つも助かる生命じやあなかつたらうに、御運かの。遊女は気がせいたか、少し狙がはずれた処へ、その胸に伏せて、うつむいていなすった、鏡で、かちりとその、剃刀の刃が留まつたとの。

私はどちらがどうとも謂わぬ。遊女の鼻痕をするのじやあないけれど、思詰めたほどの事なら、遂げさしてやりたかつたわ、それだけ心得のある婦人が、仕損じは、まあ、どうじや。」

「されば、」

「その代り返す手で、我が咽喉のどを刎はね切つた遊女おいらんの姿の見事さ！

口惜くやしい、口惜くやしい、可愛こいこの人の顔を余所よその婦人おんなに見せるのは口惜くやしい！ との、唇かを嚙かんだまま、それなりけり。

全く鏡を見なすつた時に、はッと我に返つて、もう悪所には来まいという、吃きつとした心になつたのじゃげな。

容子ようすで悟つた遊女おいらんも目が高かつた。男は煩惱の雲晴れて、はじめて拝しんむ真如しんによの月かい。生命いのちの親なり智識なり、とそのまま頂かした、鏡がそれじゃ。はて総ふさつき錦の袋入はその筈はずじゃて、お家に取つては、宝じゃものを。

念を入れて仕上げてくれ、近々にその後室様が、実の児こよりも可愛がつておいでなさる、甥御おいごが一方ひとかた。悪い茶も飲まずに、さる立派な学校を卒業なされた。そのお祝に、御教訓をかねてお遣物つかいものになさるつもり、まずまあ早くいつてみりや、油断が起つて女おんな狂ぐるい、つまり悪所入あくしよばいりなどをしなさるうにというのじゃ。

作平頼む、と差配おおよさんが置いて行ゆかれた。畏かしこまり奉るで、昨日きのうそれが出来て、差配さんまで差出すと、直すぐに麴町やしきのお邸やしきとやらへ行ゆかした。

点火頃ひともしごろに帰つて来て、作、喜べと大枚三両。これはこれとは心しんから辞退をしたけれども、いや先方様さきさまでも大喜び、実は鏡についてその話のあつたのは、御維新ごいつしんになつて八年、霜月の十九日じや。月こそ違うが、日は同一おんなじ、ちやうど昨日の話で今日、更あらためてその甥御様に送る間にあつた、ということ、研賃とぎちんには多かるうが、一杯飲んでくれと、こういうのじや。

頂きます頂きます、飲代のみしろになら百両でも御辞退つかまつ仕りまする儀ではござりませぬと、さあ飲んだ、飲んだ、昨夜ゆうべ一晚。

ウイか何かでなあ五助さん、考えて見ると成程な、その大家の旦那がすっかり改心をなされた、こりや至極じやて。

お連合つれあいの今の後室が、忘れずに、大事にかけてござらっしゃる、お心こころ懸がけも天晴あつぱれなり、来歴づきでお宝物にされた鏡はまた錦の袋入。こいつも可いわい。その研手とぎてに私をつかまえた差配さばいさんも氣に入ったり、研いだ作平もまず可いわ。立派な身分になんすつた甥御よも可いし。戒いましめのためと謂いうて、遣物にさっしゃる趣向も受けた。手間じやない飲代にせいという文句も可いしか、酒も可いが、五助さん。

その発端になつた、旗本のお嬢さん、剃刀で死んだ遊女おいらんの身になつて御覧ごらんじろ、また

このくらいよくない話はあるまい。

迷^{まよ}じや、迷は迷じやが、自分の可愛い男の顔を、他の婦人^{ほかおんな}に見せるのが厭^{いや}さに、とてもとあきらめた処で、殺して死のうとまで思い詰めた、心はどうじやい。

それを考えれば酒も咽^{のど}喉へは通らぬのを、いやそうでない。魂魄^{こんぱく}この土に留^{とど}まつて、

浄閑寺にお参詣^{まいり}をする私^{わし}への礼心、無縁の信女達の総代に麴町の宝物を稲荷町までお遣わ

しで、私^{わし}に一杯振舞うてくれる氣、と、早や、手前勝手。飲みたいばかりの理窟をつけて、

さて、煽^{あお}るほどに、けるほどに、五助さん、どうだ。

私^{わし}の顔色の悪いのは、お憚^{はば}りだけれど今日ばかりは貧乏のせいでない。三年目に一度と

いう二日酔の上機嫌じや、ははは。」ときも快げに見えた。

夕空

時に五助は反故紙ほごがみを扱しごいて研とぎ澄すました剃刀かみそりに拭ぬぐいをかけたが、持直てのひらして掌へ。

折せから夕暮そらの天暗あやく、筑波つくはから出た雲はげが、早や屋根の上から大驚おおわしの嘴くちばしのごとく田町の空さしを差さ覗ぞいて、一しきり烈はげしくなつた往来ゆききの人の姿は、ただ黒い影ゆきちがが行違ゆきちがい、入乱いりるばかりになつた。

この際ひととき一際色あざやの濃く、鮮あざやかに見えたのは、屋根越に遠く見ゆる紅梅の花で、二上屋の寮がらすの西向の硝子窓へ、たらたらと流るるごとく、横雲の切目きれめからとばかりの間、夕陽が映じたのである。

剃刀の刃てもとは手許てもとの暗い中に、青光三寸、颯々さつさつと音をなして、骨をも切るよう皮すべをこつた。

「これだからな、自慢じやあねえが悪くすると人ごろしの得物にならあ。ふむ、それが十九日か。」といつて少し鬱ふさぐ。

「そこで久しぶりじや、私もちつと冷える気味でこちらへ無沙汰ぶさたをしたで、また心ゆかしに廊くるわを一廻まわり、それから例の箕みの輪わへ行つて、どうせ苔こけの下じやあろうけれど、ぶつつかり放題、そのお嬢さんの墓と思つて挨拶をして来ようと、ぶらぶら内を出て来たが。

お極きまりでお前まいン許とこへお邪魔をすると、不思議な話じや。あと前はよく分らいでも、十九

日とばかりで聞く耳が立つたての。

何じや知らぬが、日が違わぬから、こりやものじや。

五助さん、お前の許にもそういうかかり合があるのなら、悪いことは謂わぬ、お題目を唱えて進ぜなせえ。

つい話で遅くなった。やつとこさと、今日はもう箕の輪へだけ廻るとしよう。」と謂うだけのことを謂つて、作平は早や腰を延そうとする。

トタンにがらがらと腕車が一台、目の前へ踰れて、人通の中を曳いて通る時、地響がして土間ぐるみ五助の体はぶるぶると胴震。

「ほう、」といつて、俯向いていたぼんやりの顔を上げると、目金をはずして、

「作平さん、お前は怨だぜ、そうでなくツてさえ、今日はお極りのお客様が無けりや可いが、と朝から父親の精進日ぐらいな気がしているから、有体の処腹の中じやお題目だ。

唱えて進ぜなせえは聞えたけれど、お前、言種に事を欠いて、私が許をかかり合は、大に打てらあ。いや、もうてつきり疑いなし、毛頭違いなし、お旗本のお嬢さん、どうして堪るものか。話のようじやあ念が残らねえでよ、七代までは祟ります、むむ祟るとも。串戯じやあねえ、どの道何か怨のある遊女の幽霊とは思つたけれど、何様の何だ

つかま
か捕えどこのねえ内はまだしも気休め。そう日が合つて剃刀があつて、当りがついちやあ
かな
叶わねえ。

そうしてお前、咽喉のどを突いたんだつていつたじやあねえか。」

「これから、これへ、」と作平は垢あかじみた細い皺しわだらけの咽喉のど仏ぼとけを露むきだ出して、握にぎり拳こぶし
で仕方を見せる。

五助も我知らず、ばかりと口を開あいて、

「ああ、ああ、さぞ、血が出たろうな、血が、」

「そりや出たろうとも、たらたらたら、」と胸へ真直まっすぐに棒を引く。

「うう、そして真赤まっかか。」

「黒味がちじや、鮪まぐろの腸わたのようなのが、たらたらたら。」

「止しねえ、何だなお前、それから口惜くやしいッて齒を嚙かんで、」

「怨死うらみじにじやの。こう髪を啣くわえての、凄すこいような美しい遊女おいらんじやとの、恐こわいほど品の

好いいのが、それが、お前こう。」と口を歪ゆがめる。

「おお、おお、苦しいから白魚しらおのような手を掴つかみ、足をぶるぶる。」と五助は自分で身みもだ
悶えして、

「そしてお前、死骸を見たのか。」

「何を謂わつしやる、私は話を聞いただけじゃ。遊女の名も知りはせぬが。」

五助は目を睜つてホツと呼吸、

「何の事だ、まあ、おどかしなさんない。」

十二

作平も苦笑い、

「だつてお前が、おかしくもない、血が赤いかの、指をぶるぶるだの、と謂うからじゃ。」

「目に見えるようだ。」

「私もやつぱり。」

「見えるか、ええ？」

「まずの。」

「何もそう幽霊に親類があるように落着いていてくれるこたあねえ、これが同一でも、おばさんに雪責にされて死んだとでもいう脆弱い遊女のなら、五助も男だ。こうまでは驚

かねえが、旗本のお嬢さんで、手が利いて、中間ちゅうげんを一人もんどり打たせたと聞いちやあ身動きがならねえ。

作平さん、こうなりやお前めえが対手あいてだ、放しッこはねえぜ。

一升買うから、後生だからお前今夜は泊り込こみで、炬燵こたつで附合つつてくんねえ。一体ならお勝さんが休もうという日なんだけれど、限かぎつて出てしまったのも容易やすでねえ。

そうかといつて、宿場で厄介いけどになろうという年紀としじゃあなし、無茶ちやに廊くわへ入るかい、かえつて敵いけどに生捉みけどられるも同然だ。夜が更けてみな、油に燈心あまくだだから堪ためるめえじゃねえか、恐おそしい。名代みようだい部屋いの天井てんじやうから忽然こつねんとして剃刀あまくだが天降あまくだります、生命いのちにかかわるから。よ、隣のは筋いが可いいぜ、はんぺんの煮込いを御厄介ごいけになつて、別に厚切まぐろな鰯いわしを取とつておかあ、船頭うまかた、馬士うまかただ、お前とまた昔話むかしでもはじめるから、」と目金めがねに恥しじず憎しよげたりけり。

作平が悦喜えつぎ斜なめならず、嬉うれ涙なみだより真先まっさきに水鼻すいびを噉すつて、

「話せるな、酒と聞いては足腰あしこが立たぬけれども、このままお輿みこしを据すえては例のお花主とくしに相済あひまぬて。」

「それを言うなというに。無縁塚むえんづかをお花主とくしだなぞと、とかく魔まの物を知ちかづきにづきにするから悪

いや、で、どうする。」

「もう遅いから廓廻まわりは見合せて直ぐに箕の輪へ行つて来ます。」

「むむ、それもそうさの。私も信心わっしをすみが、お前めえもよく拝んで御免蒙こうむつて来ねえ。廓どころか、浄閑寺の方も一走はしりが可いいぜ。とても独ひとりじや遣切やりきれねえ、荷物は確たしかに預かつたい。」

「何か私も旨わしえ乾物うめなど見付けて提ひものげて来よう、待つていさっせえ。」と作平はてくてく出かけて、

「こんな人ひと通とおがあるじゃないかい。」

「うんや、ここいらを歩ある行くのに怨おんり霊りようを得とく脱だつさせそうな頼母たのもしい道德は一人も居ねえ。それに一しきり一しきりひっそりすらあ、またその時の寂しさというものは、まるで

時雨やが留やむようだ。」

作平は空を仰いで、

「すっかり曇つて暗くなつたが、この陽気はずれの寒さでは、」

五助あわただ慌わしく。

「白いものか、禁物々々。」

点灯頃

十三

「はい、はい、はい、誰方どなただい。」

作平のよぼけた後姿を見失つた五助は、目の行くさきも薄暗いが、さて見廻すと居廻いまわりはなおのことで、もう点灯頃ひともしごろ。

物の色は分るが、思ひなしか陰気でならず、いつもより疾く洋燈ラングをと思ふ処へ、大音寺前さかん ひきこの方から盛に曳込んで来る乗込客、今度は五六台、引続いて三台、四台、しばらくは引きも切らず、ガツガツ、轟々ごうごうという音に、地鳴じなりを交えて、慣れたことながら腹にこたえ、大儀そうに、と眺めていたが、やがて途絶えたと裏口に氣勢けはいがあつた。

五助はわざと大声で、

「お勝さんかね、……何だ、隣か、」と投げるように呺つぶやいたが、

「あれ、お上んなせえ、構わずいとい入るべし、誰方だね。」

耳を澄^{すま}して、

「畜生、この間もあの術で驚かしやあがつた、彪^{むくいぬ}犬め、しかも真夜中だろうじゃあねえか、トントントンさ、誰方だと聞きやあ黙^{だんまり}然で、蒲団^{ふとん}を引被^{ひつかぶ}るとトントンだ、誰方だね、黙^{だんま}りか、またトンか、びっくりか、トンと来るか。とうとう戸外^{おもて}から廻つてお隣で御迷惑。どのくらいか臆^{おくびよう}病づらを下げて、極^{きまり}の悪い思^{おもい}をしたか知れやしねえ、畜生め、己^{ひと}が臆病だと思^{おも}いやあがつて、」と中^{ちゆう}腹^{ばら}でずいと立つと、不意に膝かけの口が足へからんだので、亀^{かめ}の子^こ這^{こばい}。

じただらを踏むばかりに蹴はづして、一段膝をついて蹶^{にじ}り上^{あが}ると、件^{くだん}の障子^{しょうし}を密^{そつ}と開けたが、早や次の間は真^ま暗^{くら}がり。足をずらしてつかつかと出ても、馴^なれて畳^{やぶれ}の破^{やぶ}れにも突^つかからず、台所は横づけで、長火鉢の前から手を伸^のばすとそのまま取れる柄杓^{ひしやく}だから、並々と一杯、突^{いきなり}然^{あたま}天窓^{てんそう}から打^ぶかぶせる氣、お勝^{おん}がそんな家業^{かごう}でも、さすがに婦人^{おんな}、びつたりしめて行つた水口の戸を、がらりと開けて、

「畜生！」といったが拍子抜け、犬も何にも居ないのであつた。

首を出して^{みま} わすと、がさともせぬ裏^{ちりづか}の塵^{ちり}塚^{づか}、そこへ潜^{ひそ}つて遁^にげたのでもない。彼方^{あな}は黒塀^{くろべい}がひしひしと、遙^{はるか}に一並^{ならび}、一ツ折れてまた一並、三階の部屋々々、棟の数が多いけ

れど、まだいずくにも灯が入らず、森^{しん}として三味線^{さみせん}の音^ねもしない。ただ遙^{くう}に空を衝いて、雲^{うみ}のその夜^よは真^ま黒^{くろ}な中に、暗緑色の燈^{とも}の陰慘^{しび}たる光を放って、大屋根に一眼一角の鬼の突立^{つた}つたようなのは、二上屋の常燈である。

五助は半身水口から突出して立っていたが、頻^{しきり}に後見^{うしろ}らるるような気がして堪^{たま}らず、柄杓^{へしやく}をびっしやり。

「ちよッ、」と舌打、振返つて、暗がりを透^{すか}すと、明けたままの障子の中から仕切ったように戸外^{おもて}の人どおり。

やがて旧^{もと}の仕事場の座に返つて、フト心着いてはッと思った。

「おや、変だぜ。」

五助は片膝立て、中腰になり、四ツに這^はいなどして搔^{かい}探^{さぐ}り、膝かけをふるつて見て、きよときよとしながら、

「はてな、先刻^{さつき}ああだに因つてと、手に持ったまま、待てよ、作平は行つたと、はてな。」
正に今日の日をもつて、先刻研上げた、紅梅屋敷、すなわち寮^{むすめ}の女お若^{かみそり}の剃刀を、どこへか置忘れてしまったのであった。

「懐^{ふところ}中へは入れず、」といいながら、慌てて懐中へ入れた手を、それなり胸に置いて、

顔の色を変えたのである。

しばらくして、

「まさか棚へ、」と思わず声を放つて、フト顔を上げると、一枚あけた障子の際なる敷居の処を裾にして、扱帯の上あたりで棲を取つて、鼠地に雪ぢらしの模様のある部屋着姿、眉の鮮かな鼻筋の通つた、真白な頬に鬢の毛の乱れたのまで、判然と見えて、脊がすらりとして、結上げた髪が鴨居にも支えそうなのが、じつと此方を見詰めていたので、五助は小さくなつて氷りついた。

「五助さん、」と得も言われぬやや太い声して、左の手で襟をあげると、棲を持つていた手を、ふらふらとある袖口に入れた時、裾がはらりと落ちて、脊が二三寸伸びたと思うと、肉つき豊かなぬくもりもまだありそうな、乳房も見える懷から、まともに五助に向けた蒼ざめた掌に、毒蛇の鱗の輝くような一挺の剃刀を挟んでいて、

「これでしよう、」

五助はがツと耳が鳴た、頭に響く声も幽に、山あり川あり野の末に、糸より細く聞ゆるごとく、

「不浄除けの別火だとき、ほほほほほ、」

わずかに解いた唇に、艶々つやつやと鉄漿かねを含んでいる、幻はかえって目まのあたり前。

「わッ」というと真俯向まうつむき、五助は人心地あることか。

「横町に一ツずつある芝の海さ、見や、長屋の中を突通しに廓くるわが見えるぜ。」

とこの際戸外おもてを暢気のんきなもの。

「や！ 雪だ、雪だ。」と呼わつたが、どやどやとして、学生あり、大へべれけ、雪の進軍氷を踏んで、と哄どっとばかりになだれて通る。

雪の門

十四

宵に一旦いったんちらちらと降つたのは、垣の結目ゆいめ、板戸の端ひさし、廂ゆきき、往来の人の頬びん、鬢びんの毛、帽子の鰐つばなどに、さらさらと音ずれたが、やがて声はせず、さるものの降るとも見えないで、木の梢こずえも、屋の棟も、敷石も、溝板も、何よりはじまるともなしに白くなって、煙草たばこ

屋の店の灯、おでんの行燈、車夫の提灯、いやしくもあかりのあるものに、一しきり一しきり、綿のちぎれが群つて、真白な灯取虫がばたばた羽をあてる風情であつた。やがて、初夜すぎるまでは、縦横に乱れ合つた足駄駒下駄の痕も、次第に二ツとなり、三ツとなり、わずかに凹を残すのみ、車の轍も遙々と長き一条の名残となつた。おうおうと遠近に呼交す人声も早や聞えず、辻に亘んで半身に雪を被りながら、揺り落すごとに上衣のひだの黒く顯れた巡査の姿、研屋の店から八九間さきなる軒下に引込んで、三島神社の辺から大音寺前の通、田町にかけてただ一白。

折から颯と渡つた風は、はじめ最も低く地上をすつて、雪の上面を撫でてあたかも篩をかけたよう、一様に平にならして、人の歩行いた路ともなく、夜の色さえ埋み消したが、見る見る垣を瓦り、軒を吹き、廂を掠め、梢を鳴らし、一陣たちまち虚蒼に拡がつて、ざつという音烈しく、丸雪は小雪を誘つて、八方十面降り乱れて、静々と落ちて来た。紅梅の咲く頃なれば、かくまでの雪の状も、旭とともに霜より果敢なく消えるのである。うけれど、丑満頃おいは都のしかも如月の末にあるべき現象とも覚えぬまでなり。何物かこれ、この大都会を襲つて、紛々皚々の陣を敷くとあやまたるる。

さればこそ、高く竜燈の露れたよう二上屋の棟に蒼き光の流るるあたり、よし原の電燈

の幽かすかに映うつずる空を籠こめて、きれぎれに冴さゆる三絃さんげんの糸につれて、高たか笑わらいをする女の声の、
 倒さかしまに田町へ崩くずれるものも、あたかもこの土の色の変かはつた機はりに乗のじて、空くうを行ゆく外道げどう変化へんげの囁ささき
 かと物凄ものすごい。

十二時疾とくに過ぎて、一時前後、雪も風も最も烈はげしい頃であつた。

吹雪の下に沈める声して、お若わかしが寮なる紅梅こうばいの門かどを静しずかに音信おとずれた者がある。

トン、トン、トン、トン。

「はい、今開たけます、唯ただ今いま、々々、」と内では、うつらうつらとでもしていたらしい、
 眠まじけ交ありのやや周章あわてた声して、上あがり框がまちから手を伸のばした様子で、掛金かけをがツちり。

その時戸外おもてに立つたのが、

「お待ちなさい、貴方あなたはお宅うちの方なんですか。」と、ものありげに言つたのであるが、何
 の氣もつかない風で、

「はい、あの、杉でございます。」と、あたかもその眠まつていたのを、詫わびるがごとき口くち
 吻ちゅりである。

その間まになお声をかけて、

「宜よろいんですか、開けても、夜がふけております。」

「へい、……、」ちと變つた言ぐさをこの時はじめて気にしたらしく、杉というのは、そのままじつとして手を控えた。

小留おやみのない雪は、軒の下ともいわず浴びせかけて降ふりしければ、男の姿はありとも見えずに、風はますます吹きすさぶ。

十五

「杉、爺じいやかい。」とこの時に奥かたの方から、風こそ荒すざべ、雪の夜は天地を沈めて静しずかに更け行く、畳にはらはらと媚なまめく登あしおと音。

端近はしぢかになつたがいと少く清すずしき声で、

「辻が帰つておいでかい。」

「あれ、」と低声こごえに年増としまが制して、門かどなる方かたを憚はばかる氣勢けはい。

「可よかつたら開けて下さい、こつちにお知ちかづき己の者じやあないんです、」

「……………」

「この突つきあたり当うちの家で聞いて来たんですが、紅梅屋敷とかいうのでしょうか。」

「はい、あの誰方様で、」
どなた

「いえ、御存じの者じやありませんが、すこし頼まれて来たんです、構いません、ここ
 で言いますから、あのね。」

「お開けよ。」

「……………」

「こつちへさあ。可いわ、」
い

ここにおいて、

「まあ、お入りなさいまし。」と半ばおさ圧えていた格子戸をがらりと開けた。框かまちにさし置いた洋燈ランブの光は、ほのぼのと一筋、戸口から雪の中。

同時に身を開いて一足あとへ、体を斜めにする外がい套とうを被きた人の姿を映して、余あまりの明あかりは、
ゆんで左手なる前庭を仕切った袖垣を白く描き、枝を交まじえた紅梅にうつつて、間近なるはくれない紅
つぼみてらの苔を照した。

けれども、その最もよく明かに且つ美しく照したのは、雪の風情でなく、花の色でなく、
 お杉がさした本斑布ほんばらふの櫛くしでもない。濃いお納戸地に柳立やなぎたて枠わくの、小紋縮緬こもんちりめんの羽織を
 着て、下着は知らず、黒くろ緇じゆす子の襟をかけた縞縮緬しまの着物という、寮のお若が派手姿と、

障子に片手をかけながら、身をそむけて立つた脇あけをこぼるる襦袢と、指に輝く指環とであつた。

部屋働のお杉は円鬚の頭を下げ、

「どうぞ、貴下、」

「それでは、」と身を進めて、さすがに堪え難うしてか、飛込む勢。中折の帽子を目深に、洋服の上へ着込んだ外套の色の、黒いがちらちらとするばかり、しっくり叩きの土間も、研出したような沓脱石も、一面に雪紛々。

「大変でございますこと、」とお杉が思わず、さもいたわるように言つたのを聞くと、吻とする呼吸について、

「ああ、乱暴だ。失礼。」と身震して、とんとんと軽く靴を踏み、中折を取ると柔かに乱れかかる額髪を払って、色の白い耳のあたりを拭つたが、年紀のころ二十三、四、眉の鮮かな目附に品のある美少年。殊にもものいいの判然として訛のないのは明にその品性を語り得た。お杉は一目見ると、直ちにかねて信心の成田様の御左、矜羯羅童子を夢枕に見るような心になり、

「さぞまあ、ねえ、どうもまあ、」とばかり見惚れていたのが、慌しく心付いて、庭下駄

を引かけると客の背後へ入交つて、吹雪込む門の戸を二重ながら手早くさした。

「直ぐにお暇を。」

「それでも吹込みまして大変でございますもの。」

と見るとお若が、手を障子にかけて先刻から立ったままぼんやり身動もしないでいる。

「お若さん、御挨拶をなさいましなね、」

お若は莞爾して何にも言わず、突然手を支えて、ぱったり悄れ伏すがごとく坐つたが、透通るような耳許に颯と紅。

鬚の根がゆらゆらと、身を揉むばかりさも他愛なさそうに笑つたと思うと、フイと立つてばたばたと見えなくなつた。

客は手持無沙汰、お杉も為ん術を心得ず。とばかりありて、次の室の襖越に、勿体らしい澄したものいい。

「杉や、長火鉢の処じゃあ失礼かい。」

「いいえ、貴下失礼でございますが、別にお座敷へ伺いたしますと、寒うございますから。そしてこれをお羽織んなさいまし、気味が悪いことはございません、仕立ましたばかりでございます。」と裏返しに、新調か、知らず筋糸のついたままなる、結城の棒縞の寝ね子半纏。被せられるのを、

「何、そんな、」とかえって剪賊に出逢つたように、肩を捻るほどなおすべりの可い花色裏。雪まぶれの外套を脱いだ寒そうで傷々しい、背から苦もなくすらりと被せたので、洋服の上にこの広袖で、長火鉢の前に胡坐したが、大黒屋惣六に肖て否なるもの、S.D AIKOKUYAと云う風情である。

「どうしてこんな晩に、遊女がお帰しなすつたんですねえ、酷いッたらないじゃアありませんか、ねえお若さん。あら、どうも飛でもない、火をお吹きなすつちやあ不可ません、飛でもない。」

と什麼こうすりや何とまあ？ 花の唇がたちまち変じて、鳥の嘴にでも化けるような、部屋働の驚き方。お若は美しい眉を顰めて、澄して、雪のような頬を火鉢のふちに押つけながら、

「消炭を取っておいで、」

「唯今^{ただいま}何します、どうも、貴下御免なさいましよ。主人が留守だもんですから、少姐^{ねえ}さんのお部屋でついお心易^{こころやすだて}立にお炬燵^{こた}を拝借して、続物を読んで頂いておりました処^{ところ}が、」

「つい眠くなつたじやあないか、」とお若は莞爾^{にっこり}する。

「それでも今夜のように、ふらふら睡氣^{ねむけ}のさすつたらないのでございますもの。」

「お極^{きまり}だわ。」

「可哀相^{かわいそう}に、いいえ、それでも、全く、貴下が戸をお叩き遊ばしたのは、現^{うつ}でございましての。」

「私もうとうとしていたから、どんなにお待ちなすつたか知れないねえ。ほんとうに貴下、こんな晩に帰しますような処へは、もういらつしやらない方が可^ようございますわ。構やしません、そんな遊女^{おいらん}は一晩の内に凍砂糖^{こおりざとう}になつてしまいます。」と真顔でさも思い入つたように言つた。お若はこの人を廓^{くわ}なる母屋の客と思込んだものであらう。

「私は、そんな処へ行つたんじやあないんです。」

「お隠し遊ばすだけ罪が深うございますわ、」

「別に隠しなんぞするものか。」

しかし飛んだ御厄介になりました、見ず知らずの者が夜中に起して、何だか気が咎めたから入りにくくツていたんだけれど、深切にいつておくんなさるから、白状すりや渡に舟なんで、どうも凍えそうで堪らなかつた。」

と語るに、ものもいにくそうな初心な風采、お杉はさらぬだに信心な処、しみじみと本尊の顔を瞻りながら、

「そう言えばお顔の色も悪いようでございます、あのちようど取つたのがございますから、熱くお澗をつけましょうか。」

「召あがるかしら、」とお若は部屋ばたらきを顧みて、これはかえつてその下戸であることを知り得たるがごとき口ぶりである。

「どうして、酒と聞くと身震がするんだ、どうも、」

と言いながら顔を上げて、座右のお杉と、彼方に目の覚めるようなお若の姿とを屹と見ながら、明い洋燈と、今青い炎を上げた炭とを、嬉しそうに打眺めて、またほツといきをつけて、

「私を変だと思うでしょう。」

十七

「自分でも何だか夢を見てるようだ。いいえ薬にも及ばない、もう可いんです。何だね、ここは二上屋という吉原の寮で、お前さんは、女中、ああ、そうして姉さんはお若さん？」
「はい、さようでございます。」とお若はあでやかに打微笑む。
「ええと、ここを出て突当りに家がありますね、そこを通って左へ行くと、こう坂になっていまいしょうか、そう、そこから直に大門ですか、そう、じゃあ分った、姉さん、」とお若の方に向直った。

「姉さんに届けるものがあるんです、」といいながらお杉に向い、

「確か廊へ入ろうという土手の手前に、こっちから行くと坂が一ツ。」

打 領 け ば 領 いて、

「もう分った、そこです、その坂を上ろうとして、雪にがつくり、腕車が支えたのでやつと目が覚めたんだ。」

この日 脇屋欽之助が独逸行を送る宴会があつた。

「実は今日友達と大勢で伊予紋に会があつたんです、私がちつと遠方へ出懸けるために出

来た会だったもんだから、方々の杯の目的にされたんで、大変に酔っちまってね。横になつて寝てでもいたろうか、帰りがけにどこで腕車に乗ったんだか、まるで夢中。

もつとも待たしておく筈の腕車はあつたんだけど、一体内は四ツ谷の方、あれから下谷へ駆けて来た途中、お茶の水から外神田へ曲ろうという、角の時計台の見える処で、鉄道馬車の線路を横に切れようとする発奮に、荷車へ突当つて、片一方の輪をこわしてしまつて、投出されさ。」

「まあ、お危うございます、」

「ちつと擦剥いた位、怪我も何もしないけれども。」

それだもんだから、辻車に飛乗をして、ふらふら眠りながら来たものと見えます。

お話のその土手へ上ろうという坂だ。しつくり支えたから、はじめて気がついてね、見ると驚いたろうじやあないか。いつの間にか四辺は真白だし、まるで野原。右手の方の空にやあ半月のように雪空を劃つて電燈が映つてるし、今度行こうという、その遠方の都の冬の処を、夢にでも見ているのじやあるまいかと思つた。

それで、御本人はまさしく日本の腕車に乗つてさ、笑つちやあ不可い車夫が日本人だろうじやあないか。雪の積つた泥除をおさえて、どこだ、若い衆、どこだ、ここはツて、

聞くと、御串戯ごしやうだんもんだ、と言うんです。

四ツ谷へ帰るんだッてね、少し焦れ込むと、まあ宜うがすッさ、お聞きよ。

馬鹿にしちや可かん、と言って、間違まちがいの原因もとを尋ねたら、何も朋友ともだちが引張ひっぱつて来たという訳じゃあなかった。腕車に乗った時は私一人雪の降る中をよろけて来たから、ちょうど伊藤松坂屋の前の処で、旦那召しまし、と言ったら、ああ遣やつてくれ、といって乗ったそうだ。

遣つてくれと言うから、廓なかへ曳ひいて来たのに不思議はありますまいと澄すましたもんです。議論をしたつておツつかない。吹雪じやアあるし、何でも可いから宅うちまで曳ひいてツておくれ、お礼はするからと、私も困つてね。

頼むようにしたけれど、ここまで参ったのさえ大汗なんで、とても坂を上あつて四ツ谷くんだりまでこの雪に行ゆかれるもんじやあない。

箱根八里は馬でも越すがと、茶にしていやがる。それに今夜ちつと河岸かしの方とかで泊り込こみという寸法があります、何ならおつき合なさいましと、傍若無人、じれッたくなつたから、突いきなり然靴だから飛び下りたさ。」

二人使者

十八

欽之助は茶一碗、かたちみず霊水のごとくぐつと干して、

「お恥かしいわけだけれど、実は上野の方へ出る方角さえ分らない。芳原はそこに見えるというのに、車一台なし、人ツ子も通らない。聞くものはなし、一体何時頃か知らんと、時計を出そうとすると、おかしい、す掏られたのか、落したのか、鎖ぐるみなくなっている。時間さえ分らなくなつて、しばらくあの坂の下り口にぼんやりして立っていた。

心細いッたらないのだもの、おまけに目もあてられない吹雪と来て、えいざめ酔覚じゃあり、寒さは寒し、四ツ谷までは百里ばかりもあるように思ったねえ。そうすると何だかまた夢のような心持になつてさ。生れてはじめて迷児まいごになつたんだから、こりや自分の身体からだはどうかいうわけで、こんなことになつたのじゃあなからうかと、馬鹿々々しいけれども、こわ恐くなつたんです。

ただ車夫くるまやに間違えられたばかりなら、雪だつても今帷子かたびらを着る時分じやあなし、ちつとも不思議なことは無いんだけど。

気になるのは、昼間腕車くるまが壊れていましょう、それに、伊予紋で座きまが定つて、杯やりの遣と取りが二ツ三ツ、私は五酌上戸だからもうふらついて来た時分、女中が耳打をして、玄関までちよつとお顔を、是非お目にかかりたい、という方があるツてね。つまり呼出したものがあるんだ。

灯あかりがついた時分、玄関はまだ暗かつた、宅で用でも出来たのかと、何心なく女中について、中庭あゆみの歩を越して玄関へ出て見ると、叔母の宅うちに世話になつて、従妹いとこの書物ほんなんか教えている婦人が来て立っていました。

先刻さつき奥さんが、という、叔母のことです。四ツ谷のお宅へいらつしやると、もうお出かけになりましたあとだそうです。お約束のものが昨日きのう出来上つて参りましたものですから、それを貴下あなたにお贈り申したいとおつしやつて、お持ちなすつたのでございますが、お留守だというのでそのまま持つてお帰りなすつて、あの児このことだから、大丈夫だろうとは思ふけれど、そうでもない、お朋達ともたちにおつき合で、他ほかならば可いいが、芳原へでも行くゆと危い。お出かけさきへ行つてお渡し申せ、とこれを私にお預けなさいましたから、腕車で大

急ぎで参りました。

何でも広徳寺前あたりに居る、名人の研屋とぎやが研ぎましたそうでございますからッてね、紫の袱紗包ふくさづつみから、錦の袋に入にしきった、八寸の鏡を出して、何と料理屋の玄關で渡すだらうじゃありませんか。」と少年は一呼吸いきついた。お若と女中は、耳も放さず目も放さず。

「鏡の来歴は叔母が口癖のように話すから知っています。何でも叔父がこの廓くるわで道楽をして、命にも障る処を、そのお庇かげで人らしくなつたッてね。

私も決して良い処とは思わなくても、大抵様子は分つてゐるが、叔母さんと来た日にやあ、若い者が芳原へ入れば、そこで生命いのちがなくなるとばかり信じてゐるんだ。

その人に甘やかされて、子のようにして可愛がられて育つた私だから、失礼だが、様子は知つていても廓は恐しい処とばかり思つてゐるし、叔母の氣象も知つてゐるんだけど、どうです、いやしくも飲もうといつて、少い豪傑わかが手放てばなしで揃つてゐる、しかも艶えんなのが、まわりをちらちらする処で、御意見の鏡とは何事だ。

そうして懷へ入れて持つて帰れと来た日にやあ、私は人魂ひとたまを押おっつけられたように気が滅入めいつた。

しかもお使番が女教師の、おまけに大の基督キリスト教きょう信者と来ては助からんねえ。」

うちほえ
打微笑み、

「相済まんがどうぞ宅の方へお届けを、といって平にあやまると、使の婦人が、私も主義は違つております。かようなものは信じませんが、貴君を心から思召していらつしやる方の志は通すもんです。私もその御深切を感じて、喜んで参りました位です、こういうお使は生れてからはじめてです、と謂つた。こりや誰だつて、全くそう。」

十九

「しかし土手下で雪に道を遮られて帰る途さえ分らなくなつた時思出して、ああ、あれを頂いて持つていたら、こんな出来事が無かつたのかも知れない。考えて見ればいくら叔母だつて、わざわざ伊予紋まで鏡を持して寄越すつてことは容易でない。それを持して寄越したのも何かの前兆、私が受取らないで女の先生を帰したのも、腕車の破れたのも、車夫に間違えられたのも、来よう筈のない、芳原近くへ来る約束になつていたのかも知れないと、くだらないことだが、悚としたんだね。」

もつとも、その時だつて、天窓からけなして受けなかつたのじゃあない、懷へでも入れ

ば受取つたんだけれども、」

我が胸のあたりをさしのぞくがごとくにして、

「こんな扮装いでたちだから困つたろうじやありませんか。

叔母には受取つたという事に繕そつつて、密と貴女あなたから四ツ谷の方へ届けておいて下さい

ッて、頼んだもんだから、少い夜会結わかやかいむすびのその先生は、不心服なようだッけ、それでは、

腕車で直ぐ、お宅の方へ、と謂つて歸つちまつたんですよ。

あとは大飲おおのみ。

何しろ土手下で目が覺めたという始末なんですから。

それからね。

何でも来た方へさえ引返ひつかえせば芳原へ入るだけの憂慮きづかいは無いと思つて、とぼとぼ遣やつ

て来ると向い風で。

右手に大溝おおどぶがあつて、雪を被かついで小家こいえが並んで、そして三階造づくりの大建物の裏と見えて、

ぼんやり明あかりのついてるのが見えてね、刎橋はねばしが幾つも幾つも、まるで卯の花緞おどしよろいの鎧よろいの袖を、

こう、」

借着はんでんの半纏たもとの袂たもとを引いて。

「裏返したように溝どぶを前にして家の屋根より高く引上げてあつたんだ。」

それも物珍しいから、むやむやの胸の中にも、傍見わきみがてら、二ツ三ツ四ツ五足に一ツくらいを数えながら、靴も沈むばかり積つた路を、一足々々踏分けて、欽之助が田町の方へ向つて来ると、鉄漿溝おはぐろどぶが折曲つて、切れようという処に、一ツだけ、その溝の色を白く裁切たちきつて刎橋かかの架つたままのがあつた。

「その処に婦人おんなが一人立にんつてました、や、路を聞こう、声を懸けようと思う時、

近づく人に白鷺しらさぎの驚き立つよう。

前途ゆくてへすたすたと歩行あるき出したので、何だか気がさしてこつちでも立停たちどまると、劇はげしく雪の降り来る中へ、その姿が隠れたが、見ると刎橋ひっかえの際へ引返して来て、またするすると向うへ走る。

続いて歩行あるき出すと、向直つてこつちへ歸つて来るから、私もまた立停るといふ工合、それが三度目には擦違おんなつて、婦人は刎橋おんなの処で。

私は歩行あるき越して入違いに、今度は振返つて見るようになったんだ。

そうするとその婦人おんながこうイたすんだきり、うつむいて、さも思案に暮れたという風、しょんぼりとして哀あわれさつたらなかつたから。

私は二足ばかり引返した。

何か一人では仕兼ねるようなことがあるのであろう、そんな時には差支えのない人に、力になって欲しかろう。自分を見て遁げないものなら、どんな秘密を持っていようと、声をかけて、構うまいと思つてね。

実は何、こつちだつて味方が欲しい。またどんな都合で腕車の相談が出来ないものでも無いとも考えたから。

お前さんどうしたんですツて。」

「まあ、御深切に、」と、話に聞惚れたお若は、不意に口へ出した、心の声。

「傍へ寄つて見ると、案の定、跣足で居る、実に乱次ない風で、長襦袢に扱帯をしめた

ツきり、鼠色の上着を合せて、兵庫という髪が判然見えた、それもばさばさして今寢床

から出たという姿だから、私は知らないけれども疑う処はない、勤人だ。

脊の高いね、恐しいほど品の好い遊女だったツけ。」

「その婦人おんなに頼まれたんです。姉さん、」と謂いかけて、美しい顔をまともに屹きつと女に向けた。

お若は晴々しそうに、ちよいと背けて、大呼吸おおいきをつきながら、黙って聞いているお杉と目を合せたのである。

「誰？」

「へい。」と、ただまじまじする。

「姉さんおいらんに、その遊女おいらんが今夜中にお届け申す約束のものがあがあるが、寮にいらつしやるお若さんおなじ、同一御主人おなじだけれども、旦那とかには謂われぬこと、朋友ともだちにも知れてはならず、新造しんぞなどにさとられては大変なので、昼から間まを見て、と思つても、つい人目があつて出られなかつた。

ちようど今夜は、内証ないしよに大一座の客があつて、雪はふる、部屋々々でも寐ね込んだのを機しおにぬけて出て、ここまでは来ましたが、土を踏むのにさえ遠退とおのいた、足がすくんで震える上に、今時こういう処へ出られる身分の者ではないから、どんな目に逢しおうも知れない。寮はもうそこに見えます。一町とは間のない処、紅梅屋敷といえ直じきに知れますが、あれ、あんなに犬が吠ほえて、どうすることもならないから、生命いのちを助けると思つて、これを

届けて下さいって、拝むようにして言ったんだ。成程今考えるとここいらで大層犬が吠え
たっけ。

何、頼まれる方では造作のないこと、本人に取っては何かしら、様子の分らぬ廓のこと、
一大事でもあるようだから、直にことづかった品物があるんです。

ただ渡せば可いか、というね、名も何にもおつしやらないでも、寮の姉さんはよく御
存じ、とこういうから、承知した。

その寮はツて聞くと、ここを一町ばかり、左の路地へ入った処、ちようど可い、
路もそこだというもの。そのまま別れて遣つて来ると、先刻尋ねました、路地の突当り
になる通の内に、一軒灯の見える長屋の前まで来て、振向いて見ると、その婦人がまだ立
つていて、こつちへ指をしたように見えたけれども、臃氣でよくは分らないから、一番
その灯を幸。

路地をお入んなさいって、酒にでも酔つたらしい、爺の声で教えてくれた。

何、一々委しいことをお話しするにも当らなかつただけけれど、こつちへ入って、はじ
めて、この明い灯を見ると、何だか雪路のことが夢のように思われたから、自分でもし
つかり気を落着けるため、それから、筋道を謂わないでは、夜中に婦人ばかりの処へ、た

とえ頼まれたツても変だから。

そういう訳です、ともかくもその頼まれたものを上げましょう、」といって、無造作に肱^{ひじ}を張つて、左の胸に高く取つた衣兜^{かぶと}の中へ手を入れた。――

固くなつて聞いていた、二人とも身動きして、お若は愛くるしい頬を支えて白い肱に襦袢の袖口を掬^{から}めながら、少し仰向いて、考えるらしく銀^{すず}のような目を細め、

「何だろうねえ、杉や。」

「さようでございます、」とばかり一大事の、生命^{いのち}がけの、約束の、助けるのと、ちつとも心あたりは無かつたが、あえて客の言^{ことば}を疑う色は無かつたのである。

「待つて下さい、」とこの時、また右の方の衣兜^{かぶと}を探つて、小首を傾け、

「はてな、じゃあ外套^{がいとう}の方だつた、」と片膝立てたので。

杉、

「私が。」

「確か左の衣兜へ、」

と差^{さし}俯^{うつむ}いた処へ、玄関から、この人と思うから、濡れたのを厭^{いと}わず、大切に抱くようにして持つて来た。

敷居の上へ斜ななめに拵ななめげて、またその衣兜へ手を入れたが、冷たかったか、慄ぞつとしたよう。

二十一

「可ようございますよ、お落しなさいまでも、あなたちつとも御心配なことではないの。」
探しあぐんで、外套を押遣おしやつて、ちと慌てたように広袖びとてらを脱ぎながら、上衣の衣兜へまた手を入れて、顔色をかえて悄しおれてじつと考えた時、お若は鷹揚おうように些さも意に介する処のないような、しかも情の籠こもった調子で、かえつて慰めるように謂いった。

お杉は心も心ならず、憂慮きづかわしげに少年の状さまを瞻みまもりながら、さすがにこの際喙くちを容いれかねていたのであつた。

此方こなたはますます当惑の色面おもてあらわに顕れ、

「可いいじゃありません、可よかあない、可よかあない、」

と自ら我身ののしを罵ののしるごとく、

「落すなんて、そんな間のあるわけはないんだからねえ、頼んだ人は生命いのちにもかかわる。」
と、早口にいつてまた四辺あたりをみまわした。

「一体どんなものでございます。」とお杉は少年に引添うて、渠かれを庇かばうように言う。

「私も更あらためちや見なかった、いいえ、実は見ようとも思わなかったような次第なんです。

何でもこう紙につつんだ、細長いもので、受取った時少し重みがあつたんだがね。」

お若うなずはちよいと頷うなずいて、

「杉、」

「ええ、」

「瀬川さんの……ね、あれさ、」と吞の込みさせる。

「ええ、成程、貴下あなた、それじゃあ、何でございますよ、抱えの瀬川さんという方にお貸し

なすつたんですよ、あの、お頼まれなすつた遊女おいらんは、脊の高い、品の可い、そして淋し

い顔色かおつきの、ああ煩わづつているもんだからてつきり、そう！」

と勢いきおいよくそれにした。

「今夜までに返すからと言つたにやあ言いしましたけれども、何、少姐ねえさんは返してもら

おつもりじゃございませんのに、やつと今こつちやあ思い出しました位ですもの。」

「何です、それは、」とやや顔の色を直して言つた。口うらを聞けば金子かねらしい、それな

らばと思う今も衣兜てききの中なる、指尖たまとおとしに触るるは袂落たもとおとし。修学のためにやがて独逸ドイツに赴か

んとする脇屋欽之助は、叔母に今は世になき陸軍少将松島主税まつしまからの令夫人を持つて、ここに擲なげうつて差支えのない金員あり。もつて、余りに頼たのみがい効なき虚氣うつけの罪を、この佳人の前に購あがない得て余りあるものとしたのである。

問われてお杉は引取つて、

「ちつとばかりお金子です。」

欽之助は嬉しそうに、

「じゃあ私が償おう。いいえ、どうぞそうさしておくんなさい、大したことならば帰るまで待つてもらおうし、そんなでも無いなら遣つかつて可いのを持つているから。」と思込んで言つた。

「飛んでもない、貴下あなた、」と杉。

お若は知らぬ顔をして莞爾にっこりしている。

此方こなたは熱心に、

「お願いだから、可いんだから、それでないと実に面目を失する。こうやつて顔を合していても冷汗が出るほど、何だか極きまりが悪いんだ、夜々よるよる中見みず知らずが入込んで、どうも変だ。」

「あなた、可いんですよ、私お金子を持っています、何にも遣わないお小遣が沢山あるわ、銀のだの、貴下、紙幣のだの、」といいながら、窮屈そうに坐つて畏まつていた勝色うらの棲を崩して、膝を横、投げ出したように玉の腕を火鉢にかけて、斜に欽之助の面を見た。姿も容も、世にまたかほどまでに打解けた、ものを隠さぬ人を信じた、美しい、しかも蟠のない言葉はあるまい。

左の衣兜

二十二

意外な言葉に、少年は呆れたような目をしながら、今更顔が瞻られた、時に言うべからざる綺麗な思が此方の胸にも通じたので。

しかも遠慮のない調子で、

「いずれお詫をする、更めてお礼に来ましようから、相済まんがどうぞ一番、腕車の世話をしておくんない。こういうお宅だから帳場にお馴染があるでしょう、御近所ならば私

が一所に跟ついて行くから、お前さん。」

杉は女むすめの方をちよいと見たが、

「あなた何時なんどきだと思おもいなさいます。私わたくしどもでは何でもありやしませんけれども、世間じや夜の二時過ぎでしょう。

あれあの通とおり、まだ戸外おもてはあんなでございますよ。」

少年は降りしきる雪の氣勢けはいを身みに感じて、途中を思おもい出したかまた慄ぞつとした様子。座に言ことばが途絶ことばえると漂ひようびよう渺ひようびようたる雪の広野ひろのを隔へて、里ある方かたに鳴くように、胸には描えがかれて、遙はるかに鶏けいの声が聞えるのである。

「お若さん、お泊め申しましょう、そして氣を休めてからお歸りなさいまし。
わたくし

私わたくしどもの分際でこう申しちゃあ失礼でございますけれども、何だかあなたはお厄日やくじつでもいらつしやいますように存じますわ。

お顔色もまだお悪うございますし、御氣分がどうかでございますが、雪におあたりなすつたのかも知れません。何だか、御大病の前でもあるように、どこか御様子がお寂さびしくツて、それにしよんぼりしておいでなさいますよ。

御自分じやちゃんとしてお在遊いでばすのでございましょうけれども、どうやらお心こころが確たしかじ

やないようにお見受申します。

お聞き申しますと悪いことばかり、お宅から召したお腕車は破れたでしよう、松坂屋の前からののは、間違えて飛んだ処へお連れ申しますし、お時計はなくなります。またお氣にお懸け遊ばすには及びませんが、お託り下さいましたものも失せますね。それも二度、これも二度、重ね重ね御災難、二度のことは三度とか申します。これから四ツ谷下だりまで、そりや十年お傭つけのような確な若いものを二人でも三人でもお跟け申さないでもございませんが、雪や雨の難渋なら、皆が御迷惑を少しずつ分けて頂いて、貴下のお身体に恙のないようにされますけれども、どうも御様子が変わでございます。お怪我でもあつてはなりません。内へお通いつけのお客様で、お若さんとどんなに御懇意な方でも、ついぞこちらへはいらつした験のございませんのに、しかもあなた、こういう晩、更けてからおいで遊ばしたのも御介抱を申せという、成田様のおいっけでもございましょう。

悪いことは申しませんから、お泊んなさいまし、ね、そうなさいまし。

そしてお若さんもお炬燵へ、まあ、いらつしやいまし、何ぞお暖なもので縁起直しに貴下一口差上げましょうから、

あれさ、何は差置きましてもこの雪じゃありませんかねえ。」

「実はどういふんだか、今夜の雪は一片でも身体へ当るたびに、毒虫に螫れるような気がするんです。」

と好個の男児何の事ぞ、あやかしの糸に纏われて、備わった身の品を失うまで、かかる寒さに弱ったのであった。

「ですからそうなさいまし、さあ御安心。お若さん宜うございましょう？ 旦那はあちらで十二時までには受合お休み、夜が明けて爺やお辻さんが帰って参りましたら、それは杉が心得ますから、ねえ、お若さん。」

お杉大明神様と震えつく相談と思の外、お若は空吹く風のように、耳にもかけない風情で、恍惚して眠そうである。

はッと思うと少年よりは、お杉がぎっくり、呆氣に取られながら安からぬ顔を、お若はちよいと見て笑つて、うつむいて、

「夜が明けると直お帰んなさるんなら厭！」

「そうすりや、」と杉は勢込み、突然上着の衣兜の口を、しっかりとつかまえて、

「こうして、お引留めなさいましな。」

寝衣ねまきに着換えさしたのであろう、その上衣と短胴服チヨッキ、などを一かかえに、少し衣紋えもんの乱れた咽喉のどのあたりへ押つけて、胸に抱いだいて、時の間に窠まの見える頤おとがいを深く、俯向うつむいた姿で、奥の方六畳の襖ふすまを開けて、お若はしょんぼりして出て来た。

襖の内には炬燵こたつの裾すそ、屏風びやうぶの端。

背片手うしろで密そとあとをしめて、三畳ばかり暗い処で姿が消えたが、静々と、十畳の広室ひろまに顕あらわれると、二室越ふたまた二重ふたえの襖、いずれも一枚開けたまま、玄関えんの傍わきなるそれも六畳、長火鉢ちやうにかんかんと、大形の台洋燈だいランブがついてるので、あかりは青畳の上を這すべつて、お若の冷たそうな、爪先つまさきが、そこにもちらちらと雪の散るよう、足袋は脱いでいた。

この灯あかりがさしたので、お若は半身を暗がりに、少し伸上るようにして透すかして見ると、火鉢ひばちには真鍮しんちゆうの大薬罐おおやかんが懸かかつて、も一ツ小鍋こなべをかけたまま、お杉は行儀よく坐つて、艶々つやつやしく結つた円鬘まるまげの、その斑布ばらふの櫛くしをまともに見せて、身動きもせずに仮睡いねむりをしている。

差覗さしのぞいてすつと身を引き、しばらく物音もさせなかったが、やがてぱったり、抱えて

たものを畳に落して、陰々として忍^{しのびなき}泣^なの聲がした。

しばらくすると、密^{そつ}とまたその着物を取り上げて、一ツずつ壁の際なる衣桁^{いこう}の互^{わたし}。

お若は力なげに洋袴^{ざばん}をかけ、短胴服^{チヨッキ}をかけて、それから上衣^{ひつ}を引かけたが、持ったまま手を放さず、じつと立つて、再び密^{そつ}と爪立^{つまだ}つようにして、間^まを隔つてあたかも草双紙の挿絵を見るよう、衣^{きぬ}の縞^{しま}に見えて森閑と眠っている姿を覗くがごとくにして、立戻つて、再三衣桁^{いこう}にかけた上衣^{かへし}の衣兜^{いぶち}。

しかもその左の方を、しつかと取つてお若は思わず、

「ああ、厭^{いや}だつていうんだもの、」と絶入^{ひとりごと}るように独言^{ひとりごと}をした。あわれこうして、幾久^{ちぎり}しく契^こを籠めよと、杉が、こうして幾久^{ちぎり}しく契^こを籠めよと！

お若は我を忘れたように、じつとおさえたまま身を震わして、しがみつくようにするトタンに、かちりと音して、爪先^{ひや}へ冷^{あた}りと中^{あた}り、総身に針を刺されたように慄^{ぞつ}と寒気を覚えたのを、と見ると一挺^{ちよう}の剃刀^{かみそり}であつた。

「まあ、恐^{こわ}いことねえ。」

なお且つびつしより濡れながら袂^{たもと}の端に触れたのは、包んで五助^{かた}が方^{かた}へあつらえた時のままなる、見覚えのある反故^{ほご}である。

お若はわなわなと身を震わしたが、左手に取つてじつと見る間に、面の色が颯と変つた。
「わッ。」

というと研屋の五助、喚いて、むツくと弾ね起きる。炬燵の向うにころりとせ、貧乏徳利を枕にして寝そべっていた鏡研の作平、もやい蒲団を弾反されて寝惚声で、

「何じやい、騒々しい。」

五助は服はだけに大の字形の名残を見せて、臺のような及腰、顔を突出して目を睜つて、障子越に紅梅屋敷の方を瞻めながら、がたがたがたがた、

「大変だ、作平さん、大変だ、ひ、ひ、人殺し！」

「貧乏神が抜け出す前兆か、恐しく怯されるの、しっかりさっししっかりさっし。」とい
いながら、余り血相のけたたましさに、捨ておかれずこれも起きる。枕頭には大皿に
刺身のつま、猪口やら箸やら乱暴で。

「いや、お前しっかりしてくれ、大変だ、どうも恐しい祟だぜ、一方ならねえ執念だ。」

化粧の名残

二十四

「とうとうお前めえ、旗本の遊女おいらんが惚ほれた男の血筋を、一人紅梅屋敷へ引込んだ、同一理窟おなじで、お若さんが、さ、さ、先刻さつき取り上げられた剃刀かみそりでやっぱり、お前、とても身分違ちがい
で思おもいが叶かなわぬとツて、そ、その男を殺すというのだい。今行水つかを遣つかつてら、」

「何をいわたしやる、ははははは、風邪を引くぞ、うむ、夢じやわ夢じやわ。」

「はて、しかし夢か、」とぼんやりして腕を組んだが、

「待てよ、こうだによつてと、誰か先刻さつきここの前へ来て二上屋の寮を聞いたものはねえか
」。

「おお、」

作平も膝を叩いた。

「そういうやあある。お前めえは酔よっぱらつてぐうぐうじや、何かまじまじとして私わしあ寐ねられん、
一時半いっぴきばかり前に、恐しく風が吹いた中で、確たしかに聞いた、しかも少わい男の声よ。」

「それだそれだ、まさしくそれだ、や、飛んだこツた。」

お前、何でも遊あそ女いらんに剃刀を授かつて、お若さんが、殺してしまうと、身だしなみのためか、行水を、お前、行水ツて湯殿でお前、小桶こおけに沸わぎましの薬罐やかんの湯を打ちまけて、お前、惜気もなく、肌を脱ぐと、懷にあつた剃刀を啣くわえたと思ひねえ。硝子戸がらすどの外から覗のぞいてた、私わしが方あむを仰向あむいての、仰向くとその拍子に、がツくり抜けた島田の根を、邪慳じゃけんに引ひつかんだ、顔色かおつきツたら、先刻さつぎ見た幽霊にそツくりだあ、きやあツともいおうじやあねえか、だからお前、疾はやく行つて留めねえと。」

「そして男を殺すともいうたかい、」

「いや、私わしが夢はお前めえの夢、ええ、小じれツてえ。何でもお前が紅梅屋敷を教えたからだ。今思やうつつだろうか、晩方しかも今日とぎたて研立とぎたての、お若さんの剃刀を取られたから、氣になつて、氣になつて堪たまるめえ。」

処へ夜が更けて、尋ねて行くものがあるから、おかしいぜ、此奴こいつ、鼻眞ひいきの田之助に怪我でもあつちやあならねえと、直ぐにあとをつけて行くつもりだつて、例の臆おくびよう病だから叶ゆわねえ、不性ふしょうをいうお前を、引張ひっぱ出して、夢にも二人づれよ。」

「やれやれ御苦労千万。」

「それから戸外おもてへ出ると雪はもう留やんでいた、寮の前へ行くとひっそりかんよ。人騒やせな

と、思つたけれど、あやまる分と、声をかけて、戸を叩いたけれど返事がねえ。

いよいよ変だと思うから大声で喚わめいてドンドンやつたが、成るほど夢か。叩くと音がしねえ、思うように声が出ねえ。我ながら向う河岸の渡わた船しふねを呼んでるようだから、構わず開けて入ろうとしたが掛金がつちりだ。

どこか開く処あがあるめえかと、ぐるぐる寮の周囲まわりを廻る内に、湯殿の窓へあかりがさすわ。

はて変だわえ、今時分と、そこへ行つて覗のぞいた時、お若さんが寝乱れ姿で薬罐を提げて出て来たあ。とまず安心をして凄すこいように美しい顔を見ると、目を泣腫なきはらしています、ね。どうしたかと思う内に、鹿かの子の見覚えある扱しごき一ツ、背後うしろへ縮ちりめん緬の羽織を引振ひつふるつて脱いでな、褌つまを取つて流ながしへ出て、その薬罐の湯を打ちまけると、むつとこ霧のように湯気が立たつたい、小棚から石鹼を出して手拭てぬぐいを突つ込んで、うつむけになつて顔を洗うのだ。ぐらぐらとお前その時から島田の根がぬけていたろうじゃねえか。

それですつぱりと顔を拭ふいてよ、そこでまた一安心をさせながら、何と、それから丸々ツちい両肌を脱いだんだ、それだけでも悚ぞつとするのに、考えて見りやちつと変だけれど、胸の処に剃刀が、それがお前めえ、

(五助さん、これでしよう、)と晩方遊女が遣つた図にそっくりだ。はつと思うトタンに背向になつて仰向けに、そうよ、上口の方にかかった、姿見を見た。すると髪がざらざらと崩れたというもんだ、姿見に映つた顔だぜ、その顔がまた遊女そのままだから、キャツといたい。」

二十五

されば五助が夢に見たのは、欽之助が不思議の因縁で、雪の夜に、お若が紅梅の寮に宿つたについての、委しい順序ではなく、遊女の霊が、見棄てられたその恋人の血筋の者を、二上屋の女に殺させると叫んだのも、實際にフト刺戟された想像に留まつたのであるが、しかしそれは不幸にも事実であつた。宵におびやかされた名残とばかり、さまでには思わなかつた作平も、まさしく少い声の男に、寮の道を教えたので、すてもおかず、ともかくもと大急ぎで、出掛ける拍子に、棒を小脇に引きそばめた臆病もの可笑さよ。

戸外へ出ると、もう先刻から雪の降る底に雲の行交う中に、薄く隠れ、鮮かに顕れたのがすっかり月の夜に變つた。火の番の最後の鉄棒遠く響いて廊の春の有明なり。

であいがしろ
出合頭に人が一人通つたので、やにわに棒を突立てたけれども、何、それは怪しいものにあらず、

「お早うがすな。」と澄^{すま}して土手の方へ行つた。

積^{たきぎ}んだ薪の小口さえ、雪まじりに見える角の炭屋の路地を入ると、幽^{かすか}にそれかと思う足あとが、心ばかり飛^{とび}々^{とび}に凹^{くぼ}んでいるので、まず顔を見合せながら進んで門^{かどぐち}口^{ぐち}へ行くと、内は寂^{しん}としていた。

これさえ夢のごときに、胸を轟^{とどろ}かせながら、試みに叩いたが、小塚^{こつか}原^{はら}あたりでは狐の声とや怪しまんと思わるるまで、如^{きさ}月^{げつ}の雪の残月に、カンカンと響いたけれども、返事がない。

猶予ならず、庭の袖垣を左に見て、勝手口を過ぎて大廻りに植込の中を潜^{くぐ}ると、向うにきらきら水銀の流るるばかり、湯殿の窓が雪の中に見えるところと、前の溝と覺しきに、むらむらと薄くおよそ人の脊丈ばかり湯気が立っていた。

これにぎよツとして五助、作平、湯殿の下へ駆けつけた時はもう喘^{あえ}いでいた。逡^{しりぞ}巡^{めぐ}を
する五助に入^{いれ}交^{かわ}って作平、突^{いきなり}然^{ぜん}手を懸けると、誰^たが忘れたか戸^{とじまり}締^ぢがないので、硝^{がらす}
子窓^{まど}をあけて跨^{また}いで入ると、雪あかりの上、月がさすので、明かに見えた真鍮^{しんちゆう}の大薬^{だいやく}罐^{かん}。

蓋と別々になつて、うつむけに引くりかえつて、濡手拭を桶の中、湯は沢山にはなかつたと思われ、乾き切つて霜のような流が、網を投げた形にびっしりであつた。

上口から躍込むと、あしのあとが、板の間の濡れたのを踏んで、肝を冷しながら、明を目的に駆けつけると、洋燈は少し暗くしてあつたが、お杉は端然坐つたまま、その鬚、その櫛、その姿で、小鍋をかけたまま凍つたものごとし。

ただいつの間にか、先刻欽之助が脱いだままで置いて寝に行つた、結城の半纏を被せかけてあつた。とお杉はこれをいつて今もさめざめと泣くのである。

五助、作平は左右より、焦つて二ツ三ツ背中をくらわすと、杉はアツと云つて、我に返ると同時に、

「おいらんが、遊女が、」と切なそうに云つた。

半纏はお若が心優しく、いまわの際にも勲つてその時かけて行つたのであろう。

後にお杉はうつつながら、お若が目前に湯を取りに来たことも、しかもまくり手して重そうに持つて湯殿の方へ行つたことも、知つていたが、これよりさき朦朧として雪ぢらしの部屋着を被た、品の可い、脊の高い、見馴れぬ遊女が、寮の内を、あつちこつち、幾たびとなくお若の身に前後して、お杉が自分で立とうとすると、屹と睨まれて身動

きが出来ないのであつたと謂う。

とこういうべき暇いとまあらず、我に復かえるとお杉も太いたくお若の身を憂慮きづかつていたので、飛立つようにして三人奥の室まへ飛込んだが、噫ああ。

既に遅おそ矣、雪の姿も、紅梅も、狼藉ろうぜきとして韓紅からくれない。

狂氣のごとお杉が抱き上げた時、お若はまだ呼吸いきがあつたが、血の滴る剃刀を握つたまま、

「済みませんね、済みませんね。」と二声いったばかり、これはただ皮を切つた位であつたけれども暁を待たず。

男は深疵ふかでだつたけれども気が確たしかで、いま駆かけつけた者を見ると、

「お前方、助けておくれ、大事な体だ。」

といったので、五助作平、腰を抜いた。

この事實は、翌早朝、金杉の方から裏へ廻つて、寮の木戸へつけて、同一枕おなじに死骸を引取つて行つた馬車と共によく秘密が守られた。

しかし馬車で乗のりつけたのは、昨夜伊予紋ゆいべへ、少将の夫人の使つかいをした、橘たちばなという女教師と、一名の医学士であつた。

その診察に因つて救うべからずと決した時、次の室に畏つていた、二上屋藤三郎すなわちお若の養父から捧げられたお若の遺書がある。

橘は取つて披見した後に、枕頭に進んで、声を曇らせながら判然と読んで聞かせた。

この意味は、人の想像とちつとも違わぬ。

その時まで残念だ、と呼吸の下でいつて、いい続けて、時々齒齧をしていた少年は、耳を澄して、聞き果てると、しばらくうつとりして、早や死の色の宿つたる蒼白な面を和げながら、手真似をすること三度ばかり。

医学士が領いたので、橘が筆をあてがうと、わずかに枕を擡げ、天地紅の半切に、薄墨のあわれ水茎の蹟、にじり書の端に、わか※とある上へ、少し大きく、佳い手で脇屋欽之助つま、と記して安かに目を瞑つた。

一座肅然。

作平は啜泣をしながら、

「おめでてえな。」

五助が握拳を膝に置いて、

「お若さん、喜びねえ。」

明治三十四（一九〇二）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³⁾」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

注文帳

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>